

明治150年記念 資料小展示

「文書館資料にみる幕末・明治の人・物・文化」

第4回

新収資料紹介 長井家文書

－書状にみる長井雅楽－

幕末、萩藩（長州藩）の政治を主導した人物のひとり、長井雅楽（時庸、文政2年〔1819〕～文久3年〔1863〕）はあまりにも有名です。彼は「航海遠略策」を掲げ、公武の和合を訴えましたが志半ばで失脚し、文久3年2月6日、藩命により自刃しました。享年45歳。

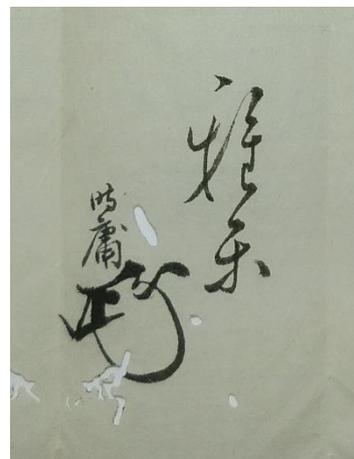
ところで、幕末史における長井雅楽の政治的活動はこれまで注目されてきましたが、彼の「人となり」についてはどうでしょうか。

このたび当館に寄贈された長井家文書には、雅楽と家族との間で遣り取りされた30通あまりの書状が含まれています。そこには、夫として、父として、長井家の長としての雅楽の「思い」が、また家族の間だからこそ表せた「本音」がしたためられています。

今回の展示では、「政治家」としての長井雅楽からは離れ、家族を持つひとりの「人間」としての一端を御紹介いたします。



「長井雅楽旧宅地」碑（萩市土原）



「長井時庸」花押（長井家文書135）

### 【資料1】長井時庸書状 (年未詳) 11月25日 長井家文書193(11の4)

萩で家を守る夫人へ宛てた書状と考えられます。

若殿様(後の元徳)が麻布屋敷へ出掛けの際、雅楽は御供頭を務めていました。ところが雅楽の家来「源次」は、酒に酔って刀を振り回し、あろうことか、屋敷の東門に刀傷をつけてしまいました。翌日詳細を知った雅楽は大いに驚き、「源次」を謹慎させた上で国元へ送り返しました。

実はこの「源次」に対する雅楽の評価は高く、これまで役に立ったのは「源次」ひとりで、彼の帰国は「蟹の手をもがれ」たようだと言っています。

雅楽は、「源次」帰国後は彼を親元に帰すよう夫人に依頼しています。そして、その後の「お咎め」はないことも報じ、安心させています。

### 【資料2】長井時庸書状 (年未詳) 正月29日 長井家文書193(11の8)

雅楽が夫人と娘の貞に宛てた書状です。

「善九郎」が江戸に到着したので国元の話聞いた後、夫人らの手紙にあった「鯨赤身」を求めたところ、「善九郎」は「そんなものは知らない」とけんもほろろの返答。残念ながらこの時の雅楽は、楽しみにしていた「ふるさとの味」を食べ損ねたようです。

展示には出ていませんが、手紙の最後の「追而書」(追伸)で、「お貞ニみやげの望ミ候ハ、無遠慮申越候様」と言っています。「娘が欲しがっている土産を買って帰ってやろう」一親心があふれた書状です。

### 【資料3】長井時庸書状 (年未詳) 3月12日 長井家文書193(11の6)

これも雅楽が夫人と娘に宛てた書状です。

貞から土産の希望が届いたようです。それを読んだ雅楽は「はらをかゝへ」て笑っています。しかし貞の望む土産はこれまでも何度か送った品であることから、それとは別の「江戸中の宜敷品」を土産とし、貞へそのことを伝えるよう夫人に頼んでいます。

また、貞が1月20日から手習いを始めたことを耳にして、「頑張れよ」(「何卒精出シ」と)の激励の言葉をかけています。

ところが、「御褒美もあるからね」(「追々宜敷ほふびも出可申」)。雅楽も人の子、娘にはちよっぴり甘い父親だったようです。

また萩での柿・梨・蜜柑の管理についても夫人から報告を受けています。家の主として、留守中の情報把握に余念がありません。

### 【資料4】長井時庸書状 (年未詳) 6月8日 長井家文書135

養子・与之助(林武美の次男で、貞の夫となる。後に実家へ戻る)に宛てた書状です。「時庸」との自著と花押がすえられています。

手習い・学問の重要性と唱え、「御役」に立つ武士の心構えを説き、日頃の「工夫」が大切だと諭します。そして帰宅した時にその「工夫」について尋ねるともしたためています。跡継ぎとして与之助を教育する雅楽の姿一貞に対する姿勢とはまた違った雅楽の一面です。